

「無肥料・無農薬・冬季湛水・不耕起栽培」

令和元年 「むかしの田んぼ」

復興祈念旗  
藤崎農園





## 「生き物いっぱい耕さない田んぼ」



カグヤの田んぼ、「むかしの田んぼ」は、千葉県の香取市にある、藤崎農場さんの一画をお借りしています。利根川が流れ、対岸は茨城県稻敷市、田んぼの一部は神崎町にまたがっています。藤崎農場では、不耕起栽培でお米を育てています。「不耕起栽培」とは、日本不耕起栽培普及会の吉澤信夫氏が提唱した自然農法で、田んぼを耕さないから「不耕起栽培」と言います。耕さない主な理由は、土の反転をしなさいことで、土中に酵素を送らず、雑草の発芽を抑えることです。また、田んぼに一年中水を張った「沼」状態にすることも、「不耕起栽培」の特徴です。



## 藤崎農場さんとの出会い

カグヤで「発酵」について深め、学び始めた2012年。千葉県神崎市で自然酒を作る寺田本家さんの酒蔵を尋ねました。その際に、寺田本家<sup>24</sup>代目当主、寺田優さんから「寺田本家のお酒は、藤崎さんのお米を使っているんですよ」と紹介頂きました。

それから毎年、田植えや草刈り、稲刈りとお手伝いに伺っていました。2018年からは、藤崎農場さんの田んぼの一部をお借りし、「むかしの田んぼ」と名付け、カグヤ米を藤崎農場さんのご協力の元、育てはじめました。

# 「むかしの田んぼ」とは

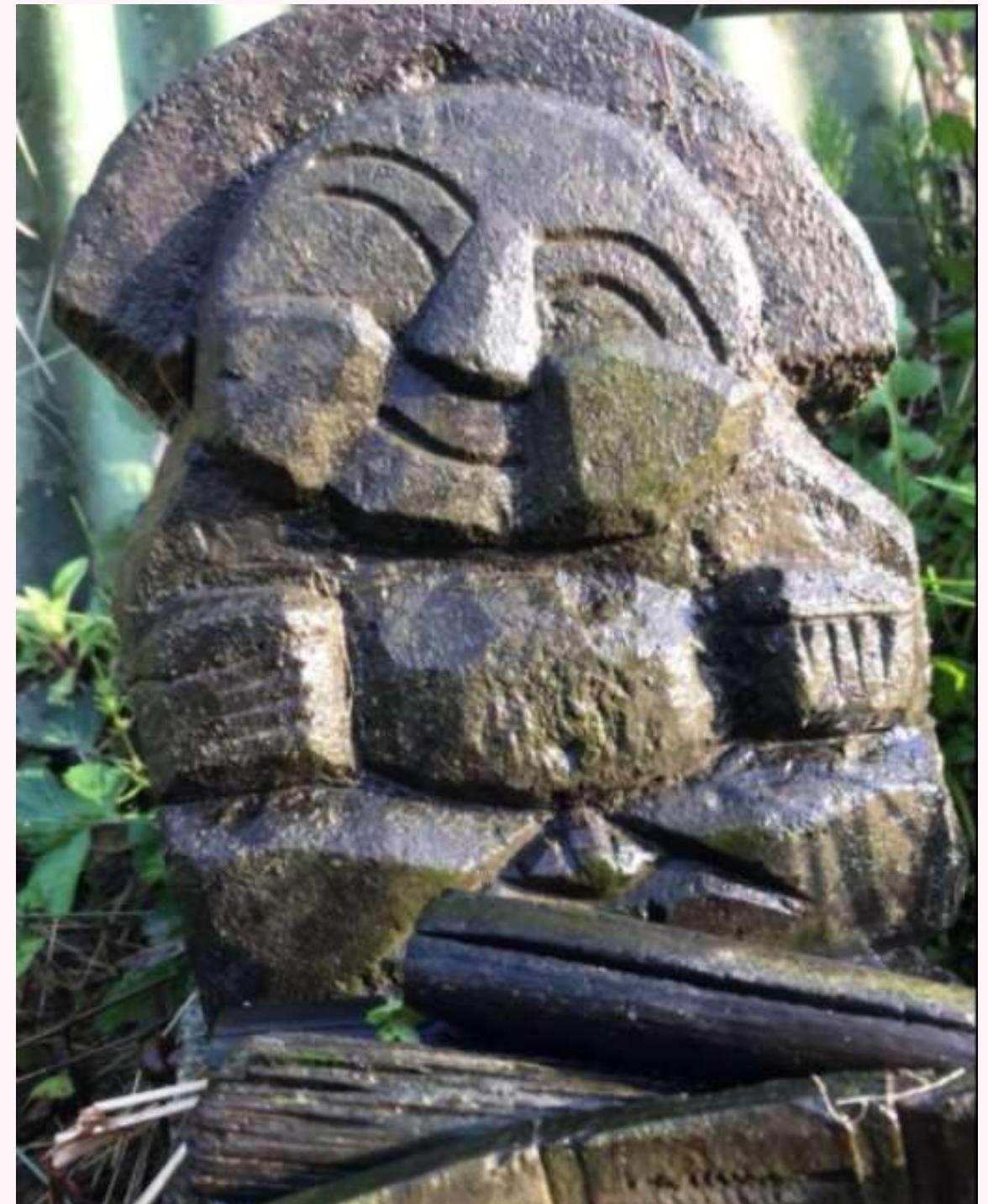


秋の収穫 はざかけ

「むかしの田んぼ」は、古来から大切にしてきた日本人の精神を尊びお米づくりを行っています。それは八百万の神々にあるようにいのちを大切にするため、農薬は一切使わず、田んぼの生態系の働きを活かすようにしています。

冬の間は、水を張ることによって渡り鳥を中心とした冬鳥たちが飛来してきて、田んぼで冬を越していきます。その御蔭で雑草の種も攪拌（かくはん）され草取りの作業もあまり必要になりません。

大量の田螺（たにし）が毎年生まれては、お米を守り雑草たちの新芽を食べてくれます。まさに、自然の働きを上手に活かして自然の恩恵によって育てるお米。それを私たちは「むかしの田んぼ」と名付けた理由です。



田の神：稻作の豊凶を見守る農耕神（写真：カグヤ福岡農園の田の神様）

春の稻作開始時期になると家や里へ下って、田の神となり、秋には山へ帰る。田仕事に携わる農民の作業を見守る、田の神信仰は日本全国各地で伝承され、これを、田の神・山の神の「春秋去來」と言うそうです。

田の神像には地蔵像、仏像、神像、農民型など様々あり、最も多いのは農民型の田の神像で、頭にわらの編み物を被り、右手にしゃもじを持って踊る姿の田の神様像だそうです。

## 一般的なお米作りの流れ

## 「むかしの田んぼ」でのお米作りの流れ

1月

### ●種糀の塩水選

2月下旬～3月

### ●種まき、苗づくり

4月

### ●苗づくり

●種まきの後 25日経ったら、育苗ハウスを全開し、  
自然の状態で 5.5葉の成苗（大人の苗）に育てます。

5月

### ●田起こし

### ●田植え

6月

### ●田植え

### ●草取り・水の管理

7～8月

### ●草取り・水の管理

### ●草取り・水の管理

9月～10月

●稻刈り、乾燥・脱穀、  
糀摺り(もみすり)

●稻刈り、乾燥・脱穀、  
糀摺り(もみすり)

稻刈り後

### ●代掻き

### ●冬季湛水（通年湛水）

田んぼに糠を撒いて水をはります。

正月早々、種もみの塩水選を行い2月下旬には種まきです。

藤崎農場は1ヶ月も早く種を播きます。

田んぼにはオタマジャクシがいっぱい、田植えが始まります  
(半不耕起では田植え前に田んぼの表面だけ軽くかき混ぜます)。

一般の農法では稚苗（2.5葉の子どもの苗）を使います。

育苗期間は慣行農法では25日前後のところ、

不耕起栽培では倍の約60日と長くなります、

丈夫な大人の苗を植える事により、

害虫や病気に強い稻になります。

苗の育つ環境が肝心！

稻はすくすく育ちます。雑草も頑張って伸びます。除草剤は使わないで、昔のように人力で除草します。

田んぼの中はカエル、メダカ、タニシ、ザリガニ、クモ、水生昆虫がいっぱいです。空にはトンボ、ツバメ、サギが飛んでいます。

田んぼの草取りは、  
足腰に負担の掛かる重労働！

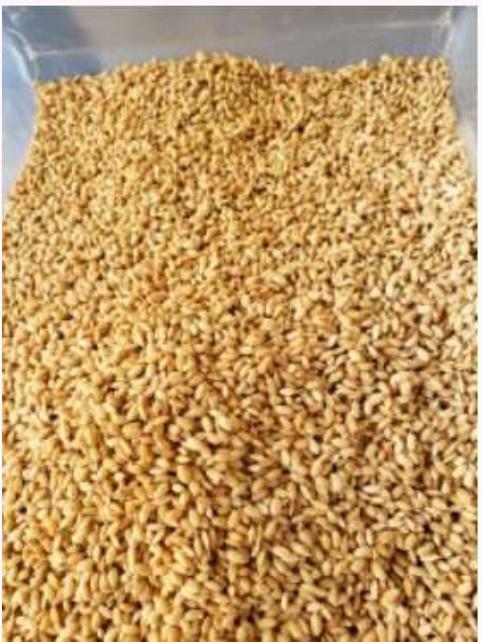
7月末から8月初めにかけて、一斉に穂を出し花が咲き受粉し、  
登熟期に入ります。

刈り取りの終わった田んぼに米ぬかを撒き、水を張ります。  
米ぬかは生きものの食べ物になります。田んぼは冬期湛水、

氷の張った水中にも生きものの活動がみられます。  
冬の静かな田んぼは、鴨がよく遊びに来ます。時々白鳥も飛来します。2月から3月にかけてニホンアカガエルが産卵のため、  
水を求めて田んぼに集まります。

冬も生き物がいっぱい！

3月



①苗箱に蒔く種粉（たねもみ）



②苗箱のセッティングなどは人の手を必要としますが、種蒔きは機械が自動で行ってくれます。



③苗箱に土が入り、種粉が均等に落とされ、水が掛けられさらに土を被せる行程



④水分を含んだ苗箱は1枚3、4キロもあります。これをフォークリフトでビニールハウスへ運び並べます。

3月中旬、田植えの準備として、種蒔を行いました。お世話になつてゐる藤崎農場の藤崎さんは「種まきが始まると、今年も始まつたと感じます。田植えまでは休みなしです」と仰ります。田植えまでのこの間、毎日気温を注意深く観察し、ハウス内が温かすぎて、早く育つても細く弱い苗になってしましますし、寒くて成長が滞つても田植えに間に合いません。長年の経験から気温や水やりの量を変え見守られています。

## 種蒔き

3月

## 一般的な田んぼの「種まき」との違いについて、お話を伺いました。



藤崎農場さんで働く郷さんに話を伺いました。

郷：藤崎農場では、稚苗（こどもの苗）と成苗（大人の苗）で言うと、成苗を田んぼに植えています。一般的な農家さんは、稚苗を田んぼに植えて、薬や肥料をあげて大きく育てるんです。

郷：成苗は5枚位です。この時期（3月上旬）は他の農家さんは種まきをしていないですが、藤崎農場は約1ヶ月半位、他の農家さんに比べると 種まきが早いでありますか？

郷：葉っぱの枚数が違います。稚苗は2枚半くらい。成苗は葉っぱの枚数が違うんですね。そのために、力が強くなるんですね。

郷：もうと、効率を考えるよね。そのために、肥料や農薬を使わないといけなくなっちゃう。藤崎さんの苗だと、大人の苗だから病氣にもある程度強いし、虫に食われない。採らなくてもいいと考えていて、でもいい。ジャンボタニシは普通の農家

す。普通は、苗箱に、芝生みたいにびっしり生

えていますが、藤崎さんは、苗箱一枚に対し70㌢ぐらゐの糊（もみ）を撒いていて、普通の農家さんは、200㌘撒いているので、下の土が見えない位、びっしり撒いています。

郷：密集させるデメリットはありますか？

郷：病気に弱い、肥料もたくさん使う。太らせてしまつ。動物で言えば、えさを食べなくていいから、それなりに身が付く。無理に食べさせて、フォアグラを作る感じ。藤崎さんの

郷：苗も 大人の苗になるまで、ゆっくり考え方はそうではなく、自然のままにゆっく

りと、苗も 大人の苗になるまで、ゆっくり

ない。箱数と言つて、田植えするときだ、

郷：短い期間で育てるから手間がかから

ない。最初の考え方方が違います。

5月

## 地域の自然の変化についてお話を伺いました。

10年前まではカエルもトンボも沢山いたものが、最近ではちらほらとしか見かけなくなってしまったそうです。カエルもトンボも自然がなければ育ちません。

あたり一面の田んぼには、ほとんどの農家が使っている農薬や化学肥料によって、生き物が住むことが出来ない環境になってきています。

徐々に徐々に汚染されていく地域の田んぼ。

そして田んぼから流れる水により、河川も汚染されていくそうです。

藤崎農場では、生き物いっぱいの安心安全なお米作りをするために、その田んぼの生態系を守り、生き物が元気に暮らせる環境を整えているため、無農薬であるだけでなく、冬場も水が貯められていて、一年中生き物一杯の有機物に満ちた田んぼになっています。それは昔の日本の原風景なのかもしれません。

本来は田んぼというのは今のように河川を汚染するどころか、水が上流から下流まで流れしていくまでに、田んぼの土を通じて窒素からなにまでを浄水する機能を備えた自然のフィルターの役割をしていたそうです。



5月初旬、快晴の元「むかしの田んぼ」で無事に田植えを行いました。今回、初めて藤崎さんのお孫さんにお会いしお話を伺いましたが、「じいちゃんのやつていることが、カッコいいって憧れて、受け継いできたいと思つて」いう言葉に心打たれ、胸が熱くなりました。信念を持つてお米作っている」という言葉に心打たれ、胸が熱くなりました。信念を持つてお米作りを続けられている藤崎さんの周りには私たちも含め、たくさんの人人が集まりますが、お孫さんに憧れるというのは何より心強く、やりがいを感じるのではないか。」

田植え



写真左：お隣さんの田んぼ

右：むかしの田んぼ（カグヤ田）

## 草取り

上の写真を見て頂くとお分かりなるかと思いますが、畦道を挟んで左右の田んぼで稲の色が違います。

右側の私たちの田んぼは一面「黄緑」といった感じですが、隣の田んぼを見ると濃い緑色をしています。

この色の違いは肥料にあるそうで、昔の田んぼは、肥料をあげていないため稲の色にも違いが出るようですが。育つ環境によって、これだけの違いが出る「ことに驚きを感じます。

そして今回は、田んぼに生える草取り（主に、こなぎ）を行いました。

一般的な田んぼでは除草剤が使われるため、直接田んぼに入つて草を取ることはあまりないようです。昔の田んぼでは、除草剤を使つていないので、草が伸びる前にみんなで草取りを行つていきました。

稻と稻の間、○印の辺りの水中には、こなぎという草が生えており、これを取つていきます。

腰を曲げての作業になるため、足腰に負担のかかる重労働ですが、秋の収穫に向けて怠れない大事な作業でもあります。

田植えから約1ヶ月、稻の生長し大きくなっていることを感じたり、トンボやタニシ、カエルなどを発見し、「草取り頑張れ」と声援を送つてくれているように感じながら、みんなで草を取つていきました。

# 美味しい、だし茶漬けを食べよう！！！

6月



美味しいだし茶漬けを食べるに当たり  
鰹節から削ろう！ということで、眞田家  
にある鰹節削り器のメンテナンスをし  
てくれました。



眞田家で代々使われている  
鰹節削り刃を研ぐため、  
刃を外します。



カンナから中々刃が外れず、宮大工の方  
の動画を観ながら刃を外したそうです。  
砥石を使って刃を研いで頂きました。



刃を研ぎ、元に戻して完成！  
眞田さん、ありがとうございます！



鰹節を削っているのはオリバー君。  
鰹節を削るのは初めての体験です。



削った鰹節をだしこし袋に  
入れていきます。



エコストーブを使い  
沸騰させます。



今回のだし茶漬けでは、一番だしのみを使います！



竈でご飯を炊いていきます。  
ご飯は昨年採れたカグヤ米！



蓋を開けると湯気が立ち上り  
ます！



まずはご飯のみで味わいます。



2杯目はだしを掛けて！



3杯目は鯛と薑味を乗せて頂きました！



4杯目は思い思いに好きな食べ方で！



作業後のご飯は最高！  
みんな夢中で頂きました！

5日連続で25度未満は「米不足」になった  
1993年以来26年ぶり

寒い7月が続く中、「むかしの田んぼ」はどうなる!?  
ということで、郷さんにお話を伺いました。



令和元年（2019年）7月に東京で夏日（最高気温が25度以上）にならなかつた日はすでに8日もあり、12日の最高気温の予想も23度と夏日ではありません。

平成の30年間で、7月に8日以上夏日がなかつたのは、平成5年（1993年）と平成15年（2003年）の2回しかありません。つまり、16年ぶりの寒い7月ということができそうです（図2）。

引用：YAHOO! JAPAN ニュース 2019年7月12日 気象予報士・饒村曜さん  
<https://news.yahoo.co.jp/byline/nyomurayo/20190712-00133531/>



1993年当時、千葉県神崎周辺ではお米の収穫は行えたそうで、北陸地域が冷夏の影響で、お米が取れず米不足となったようです。

そして今年は、確かに日照不足のようで苗の背も例年に比べると低いようですが、今後の天気予報を見ていくと気温も上昇していくと見られ、1993年程の影響は見られないのではないかと話をされていました。

そして、すでに穂に白い花が咲き始めていましたが、それは次の代に種を残すために稻自身が早い段階で、次の行動を起こしているからなのだと思います。（人間としては収量は取れずないことは困ってしまいますですが、稻にとっては種を残すことが大事なこと）

また、お米の味にも大きな影響はないだろうというのが郷さんの見立てです。

収量を目的にしていない「むかしの田んぼ米」では、収量の多い少ないに影響はありませんが、6月に引き続き、今回2度目の草取りを行いました。

# 今回の昼食は、ご飯が美味しく食べられる 豚の生姜焼きと豚汁！！！

7月



昨年、むかしの田んぼで取れたお米を  
5分づきにして竈で炊いていきます。



炊き立てご飯は、そのまま食べても  
甘くておいしい～



生姜とにんにくの味付けが最高の  
豚の生姜焼き！ご飯が進む！！！



藤崎さんの畑で採れたキュウリ  
丸ごと1本丸かじり！



豚汁の具材を炒めていきます！  
量が多いので交ぜるのも大変



豚汁の具材を炒めていきます！  
量が多いので交ぜるのも大変



地元のお味噌を入れます。



炭火でじっくり煮込んで、  
豚汁完成！



作業の途中から「お昼まだ～」なんて声もあがり、慣れない作業にお腹もペコペコ。疲れた体に豚の生姜焼きと豚汁が体に染み渡りました！

そして、何より自分たちの田んぼで取れたご飯が美味しい！  
藤崎さんご夫妻や郷さん、毎回田んぼに来るのを楽しみにしてくれて、みんなで楽しい食事のひと時に、疲れも吹っ飛んでしまいます。

今回も、千葉県のこどもの木の先生方3名にもご参加頂き、第2回となる草取り作業を行いました。

## 台風 15 号の被害を乗り越えて

2019年9月9日に千葉を直撃した台風15号。

千葉県にある藤崎農場さんも被害に見舞われました。

約1週間の停電が続き、倉庫のシャッターも一部吹き

飛ばされてしまいましたが、幸い人への被害はありませんでした。

むかしの田んぼの稻刈りを計画していましたが、関東地方に台風15号が直撃し、田んぼのある藤崎農場さんはお米を保存している倉庫のシャッターが吹き飛ばされ、停電も1週間近く続くという被害が出てしましました。そんな過酷な状況が続く中でも、なんとか稻刈りを行えるよう田んぼの排水をして下さったり、ご自身の生活もままならない中でも私たちに心を寄せ続けて下さったおかげで、なんとか稻刈り当日を迎えることができたのです。

そんな当日までどうなるか分からぬ中でも、今回はレギュラーメンバーに加え保育園の先生方が多くご参加下さり、むかしの田んぼ史上最多人数での稻刈りとなりました！

今回は稻刈りや室礼などを担当する設営班と、炭おこしから始まるか

収穫の秋！ ということで今年も

むかしの田んぼの稻刈りを計画して

いましたが、関東地方に台風15号が

直撃し、田んぼのある藤崎農場さん

ではお米を保存している倉庫の

シャッターが吹き飛ばされ、停電も

1週間近く続くという被害が出てしましました。そんな過酷な状況が続

く中でも、なんとか稻刈りを行える

よう田んぼの排水をして下さったり、

ご自身の生活もままならない中でも

私たちに心を寄せ続けて下さったお

かげで、なんとか稻刈り当日を迎

ることができたのです。

これからも関わる方々に育てても  
らえる、温かくて楽しい場を提供し  
ていきたいと思います。



種まきから稻刈りまで体験させていただき、次は収穫の喜びを味わう新嘗祭へ！



いろんな得意が集まることでみんなの笑顔も集まり、豊かな時間となります。

まご飯の用意などの食事班の2つに分かれてもらい、「日本人の生き方や知恵を子どもたちに伝承しよう」という趣旨のもと、参加者それぞれの得意を活かして活躍していただきました。先生方のおにぎりを握るスピードに驚かされたり、達筆と発想力を活かしてのぼりを作ってくれたりと、普段お会いする時にはなかなか見られない姿を見る事ができることも、むかしの田んぼの醍醐味の一つかもしれません。

この田んぼは古くから受け継がれているお米作りを体験できる場ですが、今回のように参加する方が主体となり意見を出し合い、自然とより良い場に育ててもらっているとも感じます。

これからも関わる方々に育ててもらえる、温かくて楽しい場を提供したいと思います。

冷夏・猛暑・2度の台風 厳しい1年を乗り越えた

令和元年「むかしの田んぼ」

11月

